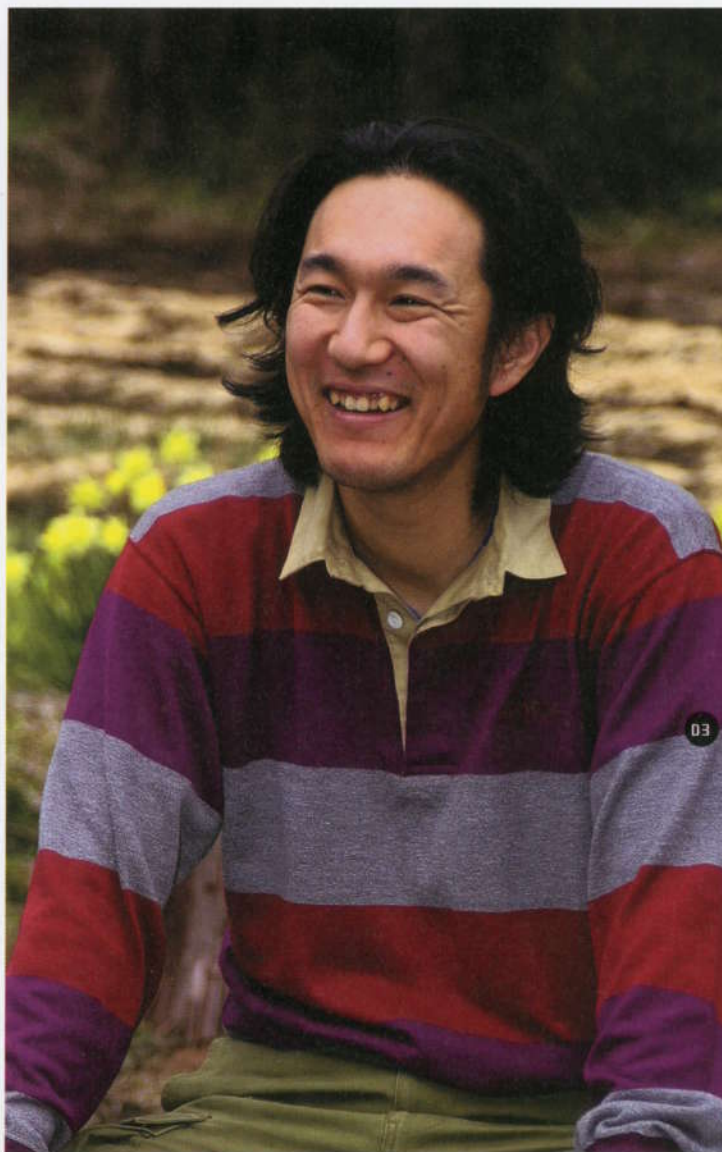


地域の人々とともに暮らし
阿蘇の環境を考えながら、
自分らしい農業を続ける。



03

：熊本市のご出身で、現在は南阿蘇村で農業に従事していらっしゃいます。その経緯を教えてください。

大津 南阿蘇村は父の出身地。農業を継いだのは叔父で、私は小さなころから叔父の家によく遊びに来ていたんです。小学校の夏休みや冬休みには、軽トラの荷台に乗って牧野に行ったり、稲刈りが済んだ田んぼや用水路で遊んだり。自然の中で過ごしたい思いばかりが残っています。

大学生時代は東京で、環境問題を学びました。その後、環境先進国といわれるドイツ・ミュンヘン工科大学大学院に留学。「農村の景観計画」が研究のテーマでした。自ら有機農業を行っている教授のもと、ドイツの農業の現場を見ながら感じたのは、農家の人たちが、「自分たちが景観や環境を守っているんだ」と胸を張っているということでした。

留学後、東京に戻ってみると、周囲はビルばかり。農業や農村のこれからについて語る場所ではないし、私自身は農業をしていないのに農村振興を語ることはできないのではないかという疑問を感じ始めました。本気で取り組むのなら、「まずは農業をやってみよう！」というわけです。また、日本の食料自給率は低下している。それを防ぐためにも（笑）、そして自分が食べるものを確保するためにも、いつかはやってみたいと思っ

プロフィール

昭和50年生まれ。18歳で慶應大学進学のために東京へ。23歳で東京農工大大学院に進学。24歳で愛梨さんと結婚し、ドイツ・ミュンヘン工科大学へ留学。27歳で阿蘇に移住。今年1月に、桔平（きつぺい）さんと連蔵（れんぞう）くんの双子が生まれたばかりの自称「百姓」。

大津

Otsu Kota

耕太



てみようと思いました。そこで、農業の基盤がある叔父の後を継ぐことに決定。周囲の人々からは、まずは反対され、「どのくらい持つのかな」と随分心配されましたが、まる3年がたちようやく「本気らしい」と思ってくれているようです。

：南阿蘇の人々と一緒に、「おあしす米」の生産も行われています。

大津 現在、叔父の農場に「02ファーム」という愛称をつけて、主に無農薬米とキュウリを栽培し、「あか牛」の繁殖も手掛けている。

ます。米の作付面積の半分を使って叔父とともに取り組んでいるのは、「おいしい・あんしん・しんせん・すてき」に由来する「おあしす米」。合鴨に加え、田んぼに鯉を放す農法で、大変な手間をかけて育てる無農薬栽培です。阿蘇は高冷地なので、病害虫が少ないから有利なんです。20軒の農家から成る「おあしす米生産者組合」は、全国700軒以上の家庭に産直販売をしています。この米の特長の一つは、複数の農家の米を混ぜないこと。それぞれの農家が収穫した米を送るシステムをとっています。この関係を続けることで、私たちの米を受け取る人々が、南阿蘇を「第2のふるさと」と感じ、気持ちだけでも米づくりに参加してもらえようになれば、これほどうれしいことはありません。それを通して「ふるさと」の景観も守られるから。

私の1年のサイクルは、5月に田植えをして牧草を刈り、夏にはキュウリを栽培。台風が来るころに米の収穫。受託している他農家の稲刈

りも行います。冬支度を済ませたら、ドイツ語の翻訳をしたり、農林水産省のホームページ用にバイオマス原稿を作成したりして過ごしています。

そうして過ごした3年を振り返ってみて思うのは、「やりたいことをやるのができて、幸せだなあ」「先輩農家はかつこいいなあ」ということ。自分で計画を立てることができると、自然を相手に思うようにはならないことも含め、少しずつ任せられるようになった農業がとても面白い。忘れられないのは、初めて育てた米を手にした瞬間です。手のひらの上の米がとても重く感じられ、生きていると実感しました。

：地域の人々との交流をはじめ、今後の夢などを教えてください。

大津 まずは、自分自身の足元を固めること。生活の基盤である「生産技術」をきちんと学ぶこともしっかりと続けていきたいですね。田舎には、同世代の人は少ないし、環境問題について考えている人も都会に比べると少ないかもしれない。そんな中でも、自然にあるもので遊んだり、工作する「南阿蘇ランドアートクラブ」というサークルを作る仲間もできました。また、ヨーロッパ各地に友人がいて、日本では、阿蘇ではということ語りあってもいいです。

今は、妻とともに、古い木造の家に住みながら、近くの畑や山で採れた旬のものを食べ、何ごとにも手間をかけて暮らしています。同年代の人たちより収入は少ないかもしれませんが、ゆとりのある幸せを感じる毎日ですよ。また、この土地は地域のつながりが濃厚。何かと面倒を見てくれるので、生まれたばかりの子どものために育てるのにもすばらしい環境だと安心していきます。

私は、一旦熊本、日本を離れたことで、阿蘇や日本のよさを実感しました。外国では、国立

公園内に人が住んでいるなんてめずらしいこと。しかし、そのことを意識している人は少ないでしょうね。私にとってもみんなにとっても大切な阿蘇の景観や環境を守っていく、というのが私の夢という目標です。その一つの方向が、農業以外の分野の人とのコラボレーション作業。まだ明確な形にはなっていませんが、近い将来、阿蘇を舞台に、皆で食料、環境、教育などを考えつつ、素晴らしい阿蘇の景観を守り、豊かな暮らしを提案していきたいと思っています。

